

ハッカソン第1シリーズ

高校生と記者 紙面制作熱く

高校生チームが紙面の出来栄を競う「新聞版ハッカソン」。第1シリーズには県内8校の生徒が参加した。精力的な取材で福井の魅力を深掘りしてきた生徒たちは6月9日、福井新聞社編集局に集結。見出しなどを担当する整理記者との協働で大胆な紙面を組み上げた。チーム内で話し合い、試行錯誤しながら創り上げる醍醐味を味わった生徒からは「新聞が身近になった」との声が上がった。

(山口晶永)

若者 2.0

議論深め 「新聞がより身近に」

新聞作りの基礎を学び、取材テーマを決めた4月末の「新聞って、こうなる講座」から50日。高校生たちは再び福井新聞社に集まった。この間、各チームは取材のポイントをとり、ペンとカメラを持って「現場」に向き、原稿を執筆した。インタビューの内容をチームで議論したというA班(若



●紙面制作端末のモニターをのぞき、高校生記者、メディア整理部記者との共同作業でアイデアを具現化し、1ページの紙面を創り上げた。紙面制作の締めくくりは発表会。各グループのこだわりをユーモアを交えて紹介すると会場は大いに盛り上がりを見せた。ともに6月9日、福井新聞社(東村淳悟撮影)

「こんな見出しにしようか...」ハッカソンでは高校生の考えを尊重し、紙面に反映させた



しやれに「紙面を斜めに区切り、記事を対比できる構図に」とレイアウトもこだわりを詰め込んだ。B班(高志、武生商)は「読みやすく、かわいい見栄え」をポイントに置き「ぼっかばか」の見出しの文字には暖色系の影を入れるよう提案した。アイデアや感性を「形」にしよつと活発に意見を出し、編集局フロアは熱気に包まれた。自由な発想を引き出そうとサポート役に徹した整理記者の一人は「高校生は実際に取材をしているので、何が大切か、何を発信すべきかがまとまっていた。比較的スムーズに作業ができた」と評価。別の記者は「原稿が郷土愛にあふれ感心した。誰に伝えたいかが明確で、そうきたか...とメッセージ性の強い、うなる見出しがあった」と褒めた。「スマホ世代だから映える写真を撮るのが上手。アプリを使った加工技術も優れていて、見習うべき点」との感想もあった。

新聞版ハッカソンは、福井新聞社の創刊120周年記念として、高校生と連携し多彩な企画に挑戦する「若者2.0プロジェクト」の取り組み。高校生と福井新聞のカメラマンがSNS上で写真の出来を競う「インスタバトル」高校生vs新聞社に続く第2弾となる。

高校生がチームで取材、編集活動に取り組んだ新聞版ハッカソン。新聞の読み手から、作り手になった体験に「普通ならできない。貴重」「新聞は大変な工程を経て作られていることを知った」などの意見が聞かれた。森岡瑞貴さん(藤島)は「白紙の状態から全てを創り上げる過程が興味深かった」と振り返った。新聞への関心も高まった様子で、濱谷幸乃さん(若狭)は「取材には勇気が必要で、いい経験になった。新聞が作られる背景や努力を感じながら新聞を読むようになった」と話していた。



写真や見出しをどう紙面に配置するか話し合う高校生たち

詳しい募集案内は30日の文化・生活面で紹介